

第1特集

エコーを聴診器の ように使おう！

ポケットの中の“第三の眼”を、すべてのプライマリ・ケア医へ

白衣のポケットに入っているものは何ですか、と問われれば、多くの先生方は「聴診器」と答えるでしょう。それは、患者さんの身体と向き合うわれわれ医師にとって、最も身近で、象徴的なツールだからです。しかし今、テクノロジーの進化は、もう1つの強力なツールをわれわれのポケットにもたらししました。それが、ポケットエコーです。

私が働く北海道のへき地の現場では、夜間・休日に患者さんが腹痛や息苦しさを訴えても、すぐに高度な検査ができる環境ではないことが多いです。そんなとき、ポケットからエコーを取り出し、患者さんの身体にそっとプローブを当てる。その数十秒で得られる「映像」の情報が、どれほど私の判断を助け、患者さんの不安を和らげてくれたことか計り知れません。胆石の有無、心不全の徴候、尿閉の確認、エコーガイド下処置。それはもはや「検査」という大袈裟なものではなく、聴診や触診の延長線上にある、ごく自然な診察の一部になっています。

今回の特集「エコーを聴診器のように使おう！」は、まさにこの体験を全国のプライマリ・ケアの現場で奮闘する先生方と共有したい、という想いから企画されました。エコーはもはや一部の専門家だけのものではありません。大切なのは、すべての疾患をエコーで診断する高度な技術ではなく、身体所見で得たヒントを、エコーという“第三の眼”で確認し、思考を深めていくプロセスです。

本特集では、その最前線で活躍されている先生方にご執筆いただきました。頸部の腫れから胸の音、腹痛の正体、そして看護師にも役立つ排泄ケアでの活用法、さらには、在宅医療という資源の限られた環境での発熱や外傷への対応、そして脱水や心不全といった全身状態の評価に至るまで、われわれが日常診療で出会うコモンな悩みに対し、「身体所見にエコーをどう組み合わせるか」という具体的な答えを示してくださっています。

本特集が、明日からの診療で「聴診器のように」エコーを使いこなすための一助となることを、心から願っています。さあ、一緒にポケットから“第三の眼”を取り出して、患者さんの身体の中を、これまで以上に見つめてみませんか。

編集幹事

利尻島国保中央病院
総合診療科

植村和平